

夏秋イチゴ 秋田で栽培広がる

冷涼な気候 安定出荷挑む

夏から秋にかけ収穫する夏秋イチゴの栽培が秋田県内で広がっている。6～11月は端境期で、冬から翌春にかけ出荷する冬春イチゴに比べ高値で取引される。冷涼な気候を生かし安定出荷できる栽培管理体制を整えられれば、新規就農など地域の活性化につながる可能性がある。

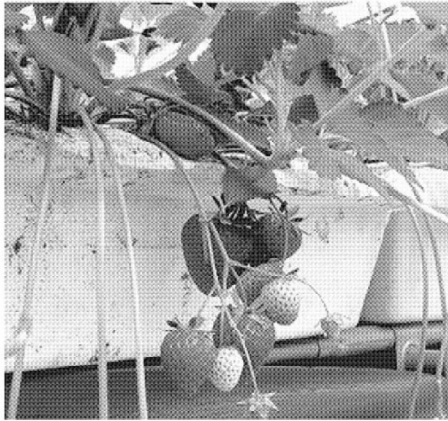
イチゴ農園などを運営する秋田食産（美郷町）は今年、夏秋イチゴの栽培を始めた。潟上市のハウスを5月29日に訪ねると、新品种「夏のしずく」の苗が青々とした葉を大きく広げていた。夏のはじめは農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）が東北5県（農研機構）が東北5県と共同で研究・育成した。甘みがあり果肉も比較的堅いことから日持ちし、遠距離など輸送時の振動にも強いという。栽培管理者の荻野次朗氏によると、収穫時期は当初予定より遅れるものの、7月上中旬と9～11月を見込む。

イチゴは生食に加え、スイーツやジャムなど業務の需要が通年ある。ただ高温に弱く、国内出荷量は6月から11月にかけて大きく落ち込む。この間、市場に流通するのはほとんどが米国など海外産だ。

高値で取引 管理体制がカギ

農園を開き、夏秋イチゴは栽培して10年ほどになる。従業員の通年雇用、洋菓子店など取引先への安定供給が狙いだ。「赤い妖精」と夏のしずくを計7000株ほど栽培する。農場長の深川哲男氏は「21年ごろから手応えをつかみつた」と語る。「夏秋イチゴは気温が高」といびつな形の果実の割合が増える。8～9月の状況次第だが、糖度のある夏のしずくは生食用に出荷できるかもしれない」と期待する。

秋田県仙北市は、4月に地元の仙北市と連携協定を結んだ。自社での生産から段階を一步進め、培った栽培管理技術を地域に普及させて、新たな産地づくりや地域の雇用増を目指す。同社はE・Jホールディングス傘下の建設コサルタント、エイト日本技術開発（岡山市）のグループ会社だ。13年に仙北市で夏秋イチゴの栽培を始めた。10年をかけて安定出荷できる栽培管理



市・株式会社ストロベリーファームのイチゴの産地創出を目的とした連携



「暖房設備が必要な冬春イチゴの栽培に比べ夏秋イチゴは初期投資を抑えられる」と指摘。「興味を持つ若手農業者もいる。農研機構の協力を得ながら、県内の生産者と連携したい」と語る。

夏のしずくは甘みがあり、果肉も比較的堅い（写真上）。仙北市と連携協定を結んだ（4月、仙北市）

ストロベリーファームは

安定出荷できる栽培管理

（磯貝守也）